

批評と紹介

外国語

『中国の悲歌の誕生——屈原とその時代』

(F・テーケイ著／羽仁協子訳)

本書が刊行されたとき、二つの点が私をひきつけた。一つは著者が六年前そのアジア的生産様式の論考の一部が訳出されたテーケイその人であったこと、その二は本書の副題にかつて郭沫若の戯曲で感動をおぼえた屈原の名があったことである。今回本書と同著者の『アジア的生産様式』（1971年、未来社刊）を読んで、両著の訳者羽仁協子氏のあとがきから著者テーケイの略歴を知り、この人にしてこの書ありと得心することができた。訳者によればテーケイ・フィレンツェは1930年生れ、今年42才のハンガリーの「中国研究家」「歴史哲学者」「美学者」であるというが、彼のもつこの三つの顔を私は本書の随所に見る思いがした。本書を一読して感じた三つの魅力（①理論的骨格のたしかさ、②作品分析に際し芸術度を問題にせずにはいないその眼、③中国文学を介して中国史を読むようなたしかな専門性）に、彼のもつ三つの顔は対応しているのではないか、かく考えるので、はじめにテーケイその人（三つの顔とその統一）と彼の東洋学にかけける意図をみておくことにする。

1

テーケイの研究者としての形成過程を知るには、訳者の次の紹介文が集約的である。

「テーケイの言によると、かれがシナ学などという珍しい専門をえらんだのは、文学青年的高校生としてブレヒトに傾倒し、ブレヒトをとおして中国文学芸術のエキゾチスムにひかれたからだそうです。しかし、大学に入ってからテーケイの興味は、急速に、中国社会そのものの歴史と構造にむけられ、なかでも、中国のその後の独自の発展の基礎となった古代中国の土地所有形態が、中心的な研究テーマとなりました。そして、中国社会の法則性を深く知るにしたがって、中国の文学芸術、あるいは、美学観といったものへの興味も、当初の文学青年的なもの、ブルジョア・エキゾチスムの立場をはなれ、マルクス主義的な視野からの東洋のエキゾチスムを解明することに向っていったのです。」（『アジア的生産様式』「テーケイの叢績によせて」）

まず文学青年として文学芸術から出発し（「美学者」）、その中で中国の文学芸術そのものにひかれ、次にそれを貫ぬいている法則性の解明（「歴史哲学者」）に向い、かくして中国の文学芸術作品の中に深く貫ぬかれる法則の発見とともにその芸術性を史的に検討する「中国研究家」テーケイが誕生する。この過程は、対象への主体的、学問的接近の道として自然であり、みごとである。「歴史哲学者」としての仕事は、ブタペスト大学修士論文「周代における土地所有関係について」（1956年）を出発点としその後の研究が前記『アジア的生産様式』（1965年原著刊）に結実している。「美学者」としては、著者と親交のある訳者が「ルカーチの弟子」と判定するほどにルカーチ美学の影響を多大に受けている。「中国研究家」としての仕事は、卒業後東洋美術館や外国文学専門の出版社に極東文学担当編集員として勤務するなかで行った中国古典詩集や中国古典哲学の翻訳と分析の仕事を土台にして、本書と、その続篇ともいえる『三一六世紀における中国詩のジャンル論』（1966年、本邦未刊）にまとめられている。後者は梁の学者劉勰の『文心雕竜』を刻明に分析し、ルカーチ美学の中心カテゴリーである「特殊的なるもの」を中国美学史のなかにみごとに具体化したものという（訳者）。また彼には魯迅論や、本書の巻末に収録された「中国古典短篇小説」「西廂記のジャンルについて」「家父長的家族を描く一紅樓夢」論などの論考がある。

「歴史哲学者」「美学者」としてもつ彼の理論が中国文学の個々の作品分析に光をあて（作品を貫ぬく法則性や作品の芸術度の理解に）、逆に作品分析でつかんだ作品のもつ具体性、特殊性が彼の理論（ジャンル論他）を吟味・改善し、豊かにしていく。この交互関係の中で彼の三つの顔＝側面はみごとなアンサンブルをなして今日の彼とその学問をつくりあげているように思う。こうした到達点に立って彼は、今日東洋学の果すべき役割を次のように提起する。東洋の文明についての両極端の誤った見解（①「東洋＝停滞・後進地域」観→東洋の芸術・文学はヨーロッパに提供すべき何物も持たない。——植民地主義的東洋観。②東洋最大級賛美論→東洋は全ての文化の母体であり、その最高峰である。アジア的特性はすべて讃嘆にあたいする。——現代ブルジョアジーの未来喪失状態の反映）を廃し、その間に折衷的でない真の中間項を設定すること、すなわち「東洋の古代諸社会の家父長的貴族性とその文化面に現われた現象を批判し、同時に真にアジアのもつ、オリジナルな価値を見出す」こと、「ここにこそ、今日東洋学の果すべき最も重要な役割のひとつがある。」

この中間項を真に学問的立場にたって見出すための「歴史哲学的原則」が、テーケイにあってはアジア的生産様式なのであるが、本書はかかる東洋学の使命の自覚の上に生まれた仕事である。

2

本書は書名となった中国古代文学のジャンル論「中国悲歌の誕生」と中国小説論を三篇収めた補論より成っているが、本欄では前者を扱うことにする。著者の意図は「古代中国において、なぜ英雄叙事詩のジャンルが発達しなかったか、原始的、端緒

的叙事体諸形式はどのような方向に発展していったのか、そして、なぜエレジー（悲歌）が、中国の詩の代表的なジャンルとして成長したのか、それに関して大づかみの解答を与えることである」。かかる著者の意図を理解するためにも、屈原の詩が偉大なエレジーと分析されていく本書の行論を追ううえでも、本書の理論の生命であるジャンルとしての「エレジー」のいみをはじめにつかむ必要がある。そのいみは本書第三部「エレジーの理論について」によれば次の如くである。

エレジー（悲歌）は叙事詩と抒情詩の中間に誕生する作品であるという。彼はヘーゲル美学にもとづいて叙事詩の本質を“客体のトタリティー”（客体の総体）、すなわち、人間をその外界の諸事物および諸制度との生きた相互関連において描写することにとらえ、一方抒情詩の本質を、主体を見えるようにすること、“内的生活のトタリティー”を表わすことに見る。ルカーチのことばでいえば、前者は「創造された自然」、後者は「創造する自然」となる。社会的現実の主要な問題が統一的な観点から見通せないばあい、つまり叙事形式的世界像が形成できないばあい、抒情詩が前面に出てくる。このばあい、抒情詩は、問題をその諸構成部分に分解して、情緒的世界の側から問題に近づき、いろいろなことがらを描写するが、そのなかには主体ないしは主観の、叙事形式的世界像を形成しようとする努力、苦しみ、緊張も含まれる。抒情詩の叙事詩へ向っての努力は殆どのばあい不成功に終るが、特定の条件のもとで、ある程度成功すると、叙事詩への戦いがすでに叙事形式的方法で描かれる段階に達する。このとき生まれる、叙事詩と抒情詩の中間に位する作品がエレジー（悲歌）であるというのだ。叙事詩になりえないながらも、叙事形式の挫折が、本質的な社会的歴史的関連を把握し、かつ表現しているばあいにエレジーは中間ジャンルのにもかかわらず、全き価値を有する作品となりうるし、ジャンルとしても、全価値的な、独自のジャンルとなりうるという。かくてエレジーは、「客観的なことがらの経過を直接に反映する内面的な過程の、可能な限り客観的な表現を必要とする独立した、エピコ・リリック（叙事形式的抒情詩—引用者）のジャンル」と定義される。

ではなぜ古代中国では叙事詩が発達せずエレジー（悲歌）というジャンルが代表的なものとして発達したのであるか。それはひとえに「中国の歴史のなかで根本的に重要な時代」＝周代（紀元前十世紀—紀元前三世紀）が、家父長的な種族的共同所有を基礎にもつ、独特な、過渡的形態の階級社会であったことにあるというのだ。彼は周代をば、まだ土地の私的所有は存在せず、ただ所有の第一の形態すなわち個人が共同体の成員としてのみ土地に関係する時代とみた。しかし周代の所有形態は無階級社会の種族共同体のそれではなく、そこにある変化が生じていた。種族共同体のそれは農民の形成する村落共同体においてのみ存続しているだけで、「その他のすべての、より大きな共同体（種族および種族連合）は、それ以前に、すでに崩壊してしまったか、ないしは変形し、血縁関係的性格を失い」現実には存在していなかった。そこで周代ではもとの大共同体のかわりに、家父長的徴税組織、官僚主義的組織体が形

成され、ここに家父長的貴族階級のヒエラルキーとその頂点に立つ家父長的専制君主の体制が成立することになる。この「家父長的貴族階級はもはや現実の公共機能を果たすこともできず、完全に寄生的存在となり、徴税がその最も重要な職務となる。この徴税の機能といえども、昔のように真の公共の備蓄のとり扱いではなく、寄生的貴族階級の生存基盤の確保にほかならない。」つまり「土地の家父長的共同所有、その国家所有の基礎のうえに一搾取が現われるのであり、貴族階級が農民の搾取者」となる。そこで「貴族階級にとっては、家父長的体制を守るために（この体制は「上から、貴族階級の側からみてのみ、現実的存在であるが、下から、村落共同体の側からみれば抽象的存在」であったので）、より大きな諸共同体の存続の証明が必要」になる。かくして周代貴族階級は搾取のための擬制的共同体＝家父長体制を「永遠の昔から存在し、“天意”のなすところであり、これを変えることあたわぬものである」とするイデオロギーを周代の思想・文学に要求した。「実に、この貴族階級の階級的要求が、周代における中国文学と哲学を生み、そして、独特な中国的文明を創造したのである。」この家父長的イデオロギーは「あからさまに護教論的であり、完全に散文的であり」「うそないしは散文的なものをむりやり詩的にうそぶかせるという役割を文学におしつけ」「その本質において反芸術的要因」であり、「純粹にはただの一度も芸術的創造を可能にしたことはない」という。よってこのイデオロギーの支配するもとでは「客体のトタリティー」をえがく「真の叙事詩やドラマ」は生れそだたないことになる。

では家父長体制の本質をみぬき、この体制をおびやかしうる社会的存在とイデオロギーは周代に登場しえなかったのか。周代社会が私的所有の欠如、農村共同体に基盤をもつ農業と工業の家父長的一体性の上に成り立っていたとすれば、この基盤をおびやかす勢力は土地の私的所有をめざす都市アリストクラシー（貴族）であり、そのイデオロギーは反家父長的哲学である法家思想であったと彼はみる。そのいみはこうである。彼は家父長的専制主義社会の根本的な諸問題を明瞭に看取しうる人間は何らかの理由で農村的共同体から追われ、離れた人々、共同体と共同体の隙間で生活することを余儀なくされた人々であったとみる。当初これらの人々の生活には喜びはなかったが、商業を営むことが可能となると周代の末期には「富裕な商人となり、そこからプレブスの、反家父長的、都市アリストクラシーが形成されていった」と考えた。これが都市アリストクラシーが、家父長的体制の問題性を認識しうる可能性をもつ根拠である。

かかる視点からすると中国古代における法家思想とその担い手都市アリストクラシーは革命的な性格をおびてくるが、それがその後その使命を達成しえなかったのは中国社会のアジア的性格、すなわち農村共同体の強固な存在と私的所有の不貫徹＝都市アリストクラシーの基盤の脆弱性、によって、儒家思想と家父長的貴族勢力と妥協していったことによる。テーケイはこれを現実そのものの敗北、中国古代社会そのもの

の転落と形容する。それは中国そのものの悲劇であった。屈原の悲劇性もここに根ざす。

3

屈原が楚の懷王のもとでその政治的手腕を発揮していた時代（前三世初）は、事実上西の秦、東の齊、南の楚が中国の覇権を争う激烈な攻争の時代であった。このうち秦が四世紀半ばに法家の思想家商鞅の変法によって国内の家父長的貴族階級をおさえ、富国強兵をおしすすめて優勢であったが、楚も四世紀初めに法家の思想をもつ呉起將軍が家父長的貴族階級に対抗して種々改革を行なったという。

史記によれば屈原は懷王の命を受けて法律作成の任にあたっていた。この仕事のいみをテーケイは、屈原は呉起の思想をひきつぎ、秦に対抗するための、また国内の貴族階級をおさえるための施策と解し、自らを法家的政治家たらんと励んでいたとみる。しかし楚は秦と比べてその改革がひかえめであったため（領土の広大なため）、客観的には家父長的貴族階級のまきかえし、具体的には上官大夫靳尚の讒言によって屈原は政治の場から放逐されてしまう。詩人屈原はこの悲劇の中から誕生する。

「かれをうたへかりたてていったものは、たんなる不正な放逐、時代の退廃、いにしえの理想の無残な冒瀆、ではない。そこには、進歩と反動の戦いの場である主都（「宮廷に身をおいてこそとりくめる」「都市的な政治課題」の場—引用者）から遠ざけられ、追放されていることによる無性の焦り、こうしてはいられないのだ、という憤りがある。漸く、何をなすべきかについて何かがわかりはじめたときに、政治から隔離され、村落的無為無策に身をまかせていなければならない！」

「時代の最も重要な問題」すなわち「いずれかの一国がヘゲモニーを握ろうとすれば、全家父長主義体制を粉砕しなければならない」という問題を認識しえたその時は、すでに政治の場から放逐されていたという悲劇。屈原の詩のエレジー性はここに根ざすという。

屈原の詩は社会のトータルな認識（→叙事詩）をめざしたものであるが、結果は失敗に終わった。テーケイはこの不成功の真因を中国の「現実そのものの敗退」＝中国社会のアジア的性格の勝利にもとめる。だがかかる中国社会の悲劇のなかで「かれの時代について最も客観的な作品」＝「古代中国社会の停滞性の、可能な限り叙事詩的表現」が屈原の詩作品として誕生した。その質の高さは、自己の運命を通して中国社会の本質的問題に迫った点で詩経の民衆詩のもつ一般抽象性を数段もつき破ったものであり、ここに世界文学的意義をもつ「偉大なエレジー」＝「芸術詩」として結論されるのである。

4

本書から啓発されたものはすこぶる多い。とりわけ強く感じたことは、彼の中国古典文学史研究の中でアジア的生産様式の理論と、彼の芸術美学理論が生きていることである。これらの理論を自己のものにしきっている（自己の理論をもっている）から

こそ、従来の「偉大な悲劇詩人屈原」という一般的評価にメスを入れ、その歴史性、具体性をつかみだすことができたのだと思う。彼の周代社会の基本的対抗関係のとらえ方や法家思想の評価は、『中国思想通史』（侯外廬他著）のそれとほぼ同じであり、その影響を受けていると思われるが、テーケイには独自のアジア的生産様式論があり、中国古代社会の法則性を自力で探求していること、またそれを叙事詩と抒情詩（その中間のエレジー）の理論と結合させて中国古代の文学作品の本質把握に迫ったことが、中国（日本のそれはいうまでもなく）の研究にはない新しさ、貢献であると思う。私が本書から学んだことは、文学や思想作品の歴史的＝本質規定にあたっては、その作品を深く貫ぬく歴史の法則性の把握が決定的いみをもつこと、かつその作品の形態を規定・把握するための文学・思想理論が不可欠であること——この二点である。換言すれば文学や思想を研究するものにとってこの二つの大変な努力と厳しさを要する作業を営々と不断につみ重ねることの大切さである。本訳書でただ一つ惜しまれることは、著者が行論の中に引用した原詩の口語訳を、著者の口語訳ではなく（著者の口語訳を訳さずに）、日本人の訳を採用していることである。著者が原詩をどう解したかが本書の立論の成否を左右する要素の一つであることを訳者に考えていただきたかった。本書について批判らしきものを一つも展開できなかったのは、断るまでもなく一に私の非力による。

（小川晴久）